基肄城築造1350年

基肄城を知る⑱

―基山を守ってきた人々―

基肄城跡のある基山は、様々な人々によって守られてきました。基肄城跡を、国の特別史跡に導いてくださった専念寺のご住職・久保山善映先生を始め、郷土史家の方、大学の先生など、専門的な知識を持つ方もいらっしゃいますが、町民の地道な力も忘れてはなりません。

「基山が大好きでごみ拾いを始めました。」

そうおっしゃるのは、詩吟サークル「清翠会」の大久保桂子さん。ご主人の退職を機に、役場のアダプトプログラムを利用してごみ袋の提供を受け、13年前にメンバー12名ほどでごみ拾いを始められました。現在は、田中和子さんと2人で1か月に2回、瀧光徳寺の駐車場から山頂まで、ごみを拾いながら登られています。初日の出の参拝者で汚れたトイレも見るに見かね、掃除を始められたそうです。

「最初は、自家用車に運転手しか乗れなくなるほどごみが出ていましたが、今ではほとんど無くなりました。」と朗らかに話されていました。また、他のメンバー5名と、山頂駐車場のすぐ上に芝桜を植えてから今年で11年目を迎えましたが、イノシシが荒らすため、昨年からは彼岸花を植えてくださっています。

「基肄山歩会」の方々には、基山の山道を守っていただいています。平成5年に「山登りを通じて趣味の振興並びに会員相互の親睦と融和を図る」ことを目的に発足しました。当初の会員数は53名、22年経った現在は34名となりました。山登りを楽しみながら、基山の荒れた山道の復興に尽力されています。平成19年には基肄城からつつじ寺として知られている大興善寺までの道を「きのくに古道」と称して、木竹の伐採・整備と案内標識の設置がなされました（写真1）。このことによって、昔は大興善寺の参詣の道として頻繁に使われていた山道が見事に甦り、大興善寺を復興した玉岡誓恩氏の名前を彫った道標などの文化遺産も再び日の目を見ることができました。毎年4月と9月には、瀧光徳寺の裏から山頂までの整備や、水門跡から山頂への歩道の点検もされています。

写真1　基肄山歩会の活動風景

これは、基山中学校の登山行事前に、生徒が安全に登れるように毎年行われています。

そして、何より忘れてはならないのは、基山のお膝元である6区の方々の力と基山への思いです。古くから基肄城の東北門近くまで田畑をつくり、牛の飼料のために毎朝草刈りをして、土塁線が見える草原に近い山を維持してくださいました（写真2）。丸林の方からは「山火事があれば、山を駆け上がり、火を消しに行った。」と聞いたことがあります。戦後、基山は戦中の乱伐を改善する国の植林計画を受けて、植林がなされていきました。小倉分（6区）の原野は3代表の名義で登録していましたが、当時の区長や名義者代表の努力、組合員の現物・現金出資により昭和36年に「城戸生産森林組合」が発足しました。これは、個別に所有されている山林を生産森林組合に集積することで、全体に調和のとれた維持管理と手入れをし山を守ろうと、当時、ほとんどの6区在住者が加入して結成された組合です。現在では、その大部分を基肄城保存地区として町に譲渡されましたが、それまでは全組合員が協力し、手弁当で定期的な草刈りや枝打ち、間伐等の手入れを続けられ、健全な森林として親から子へと引き継ぎながら、維持してこられました。

基山はこのほかにも多くの人々の思いで、それぞれの時代に合わせて守られてきました。これからも次世代へと守られ続けていくことでしょう。

写真2　かつての基山山頂
（土塁線が良く見える）

※問合せ先
教育学習課　ふるさと歴史係
電話92―2200